〈青森県史〉の窓 129

宵宮の話
～初夏の風物詩～

福島　春那
（青森県史編さんグループ　非常勤嘱託員）

津軽地方、特に青森市や弘前市に生まれ育った人たちは、「ヨミヤ」と聞けば、初夏の涼しい夜、神社の参道に立ち並ぶ露店の間を、裸電球のほの明かり頼りにわくわくと歩いた経験を思い出すだろう。

弘前市東城北の神明宮の宵宮
2006（平成18）年６月15日・県史編さんグループ撮影

この時期、津軽各地の寺社では次々とヨミヤがひらかれる。昼下がりに、パンパンと花火の音が聞こえると、今日はどこの神社かと首をひねるほどで、地元紙には例年、それらの開催日程が掲載される。２００９（平成21）年４月26日付の陸奥新報では「初夏の風物詩　宵宮の季節到来！」との見出しで弘前市近辺の予定として、５月から10月にかけて80を超える日程がずらりと示されている。

さて、ヨミヤは、夜宮あるいは宵宮と書かれる。一般的に、宵宮とは祭日や本祭の前夜を指す。民俗学では夜の間に神霊を迎え翌日に祭るため、祭場の準備をすすめ供物を整え、神事に関わる者たちが物忌みに籠もる意味合いがあったともいわれる。

津軽でもヨミヤの翌日には神社の例大祭が執り行われ、カグラ（神楽）などと呼ばれている。県内の傾向として、各神社例大祭の日程は、南部地方では春秋２回とする例が多いのに対し、津軽地方では６月を中心とする夏季に集中しているという（『青森県の神社』平成14年、青森県神社庁発行）。これらの前夜祭であるヨミヤが、先述のとおり、独立した行事のように扱われることが多いのである。

水田が広がる津軽平野、その農村での暮らしを鑑みると、６月は田植えを終え、水稲の健やかなる育成を祈る時節である。田植え作業を「ゴガツ」、これが終わると「ゴガツアガリ」ということからも、意気込みと労力がうかがえる。

本家分家の親戚や近隣の人たちと共同で組み、村中の田植えが終わると、サナブリといって慰労の休みが設けられた。こうした村の人たちが一斉に仕事を休むことをムラヤスミやトメヤスミといい、正月やサナブリに続き、村の産土社のヨミヤもこうした休み日のひとつであった。

ヨミヤの日には赤飯を炊き、餅をついて神仏に供え、また親類縁者が集まって楽しむのである。筆者の生家がある弘前市独狐（とっこ）では、同集落の七面様のヨミヤの日、ついた餅を近隣の集落に住む親戚の家に持参して、「今日、おらほのヨミヤだはんで来てけろじゃ」と声を掛け、夕方から夜にかけて集まった親類縁者にごちそうを振る舞う。

ヨミヤは娯楽であると同時に、人々の交流の機会でもある。ねぶた、盆踊りと続く祭りの季節、津軽の夏を告げる風物詩の光景なのだ。